の言葉を以てせしめ、男子をして、其の戰に臨む
に、彼の決心を以てせしむ。

記せよ、楯を皷して、凱歌を奏する能はずんば楯に乘る死尸となりて還れとは、其の最愛の、妻の唇より漏るゝ詞なることを。

恥あるもの、誰れか奮はざらんや。其の情や、誠に、悲愴を極むと雖ども、其の事や、實に、烈日秋霜の如く、千古に亙りて、人の肺肝に徹するものあるを覺ふ。

嗚呼、豈涙なからんや。凛乎たる精神は、遂に之を漓ぐを容さゞるなり。（未完）

織田信行の侍女勝子

布士迺舍

勝子の質性

勝子！はてな、私のお友達にも

同じ名の人があるが……。織田信行の侍女！　織田信行といふ人は、皆さんも御存じの信長といふ豪將の弟で、尾張の岩倉城といふお城に居つた人にちがいない、信行や信長には當時侍女も多數居つたでせうに、その中でひとり三百五十余年を經て今の世に殘つて、皆さんのお手本とされて居るのは、何か面白い事跡があつたのであらうと、種々調べて見ると、成る程あるは〳〵、それは悲しい事や心持ちのいー事があります。親父さんや阿母さんの名は傳はらず、自分の姓もわからない程の貧しい農家に生れ、朝夕田畑の泥に穢れた中にそだつた女子でありながら、その心の綺麗な事つたら、お化粧でごまかすありはせのお嬢さんとは比べ物にならない。

又その力のあつた事をいへば、梅が谷や大砲ど

ころではない、かの家康などいふ何貫目あるかわからい樣なふとったおぢさんをかつぎだし、何万人といふ人を一時に騷がせよーとまでし、しまひには國を背負つて立つた位、それは〳〵偉い人である事が解りましたから、是非皆さんにもお話ししたいと思ひまして……。

信行の臣津田彌八

さて當時多勢ありました信行の御家來中に、津田彌八といふ人がありました、もと御城下近くの在鄕生れの者ですが、家計も豐かでないので御城に御奉公する事になりました。しかしもと〳〵學問もないお百姓ですから始めは勝手廻りの仕事をして、恰度太閤樣のお若い時のよーに、薪を割ったり水を汲んだりして居ましたが、百姓とはいひながら賢くてその上心だてがよく、よく主人の命を守り從順に正直に働くので、だん〳〵とりたてられて遂に身分を戴き、とう〳〵御傍の御用人とまでなり、何でも彌八彼でも彌八、彌八〳〵とまではどうか知りませんが殿樣の御使ひや何かには是非彌八でなくてはといふ程に、御信任が渥くなりました。

信長の臣佐久間七郎左工門

さてお話しはかはつて、その當時信長の方には大切な普代の御家來に、佐久間七郎左工門といふ奸獰邪智な人がありました。この人は勝家に仕へて夜叉玄蕃といはれ、饒勇の聞こえあつた佐久間盛政の弟で、家柄といひ身分といひ勢力といひ、先祖のお陰で威張つて居つて、同情などいふ事にとぼしい、いはゞ我が儘一天張で成長した人でしたから、かの津田彌八が信行の御使ひで信長のところへ來たりまた七郎左工門か信行のところへ行つたりすると

きに、同じく肩を比べるのを殘念に思つて、あんな身分も何にもない土百姓のなりあがりと席を同じくし、直接に言葉を交はすのは汚らはしいなどゝ、身分やなんぞを持ち出して、彌八の出世を大層猜んで居ました。

勝子の許嫁　彌八は學問といつては別にないのですが、第一心立てが正しい上にうまれつき賢いので、日に益し信行の愛はふかくなり、信行が年來わつく信用して使つて居つた忠實な侍女と、二三年の内に結婚するよーにといふ事を双方に言ひ含め、内々その事に定まつたのでした。

人は假令わるい事をしても、自分だけは誠をつくして行かなければならない。誠は最後の勝利であるといふ事は、彌八の精神ですから、心に僞虚とか猜疑とかいふものは毛頭ないので、自然人を見てもさういふ事を推察する餘裕がないのです。然るに猜み深い七郎左工門は、信行の寵愛が日に〳〵まして、出世する彌八を仇に思ひ「なーに百姓風情が……」と、女々しくも嫉妬の炎に我れと身を苦しめ、奸計をめぐらしたのです、茲において或時忠實なる彌八の身は、突然起つて猛惡な一陣の風のために、草葉の露と諸共に、はかなくも吹きちらされてしまつたのです。

勝子の確志　信行の驚き悲しみはさてをき、勝子の愁傷はいかばかりでしたらう。かりにも主の恩命で一生の苦樂をちぎつた勝子の悲歎はいかばかりでしたらう。然し元來氣象優れた勝子は、一片の感情を面にあらはさず、飽くまで固い意志の下に、恐るべき覺悟を決めたのです。信行はいくら騒いで敵にその罪を詰つても、一度地下に冥

したはかなき露の身は、再びもとの葉末にかへらないのです。

今や股肱の臣を失つて、片手を殺がれた樣に力をかとして居る信行は、また一方に、ひたすら意を明かして暇を歎願する侍女勝子の心情をも汲まねばならないのです。しかし信行がいかに同情の念に富んで居たとしても、その決心をきいては將來を危み、女子の纖弱を憂ひ、再三慰撫してこれを制してはみたものゝ、勝子の意志は日を追うてます〳〵固いので、つひにその覺悟を許し暇を出したのです。覺悟とは何でせう？覺悟とは……

昔の復讎今の自立　復讎！　復讎は野蠻未開の國の風ですから、文明國では惡德の最も大なるものとして忌み嫌ふのです。我が國でも道德上は無論、法律上でさへ今日は禁じてあります。然るにこの時代には道德上立派な事と、自然の風がなつてをつたのです。今は政事がゆき屆いて、かういふ惡人は直ちに刑に處せられますが、この頃は社會の秩序も法律の制裁も今とは大層違つて、國民は日夜安き心も無く、强いものは弱いものを苦しめ、惡人は跋扈し、些細な事にも血の雨をふらすといふ世ですから、自然この復讎などいふ事が、却つて世の秩序を維持するといふ風があつたのです。

それでこの時代には、最も立派な德と世の中が認めて居た事は、今の世からいふ場合に、貞を守り自活しうるだけの學問或は技藝を脩めて自立し亡靈の冥福を祈り事をなして、誠意を世にあらはすと同じ價値のある行爲なのです。それ故社會的一時の行動はすてゝ、靑史に輝く所以の精神を汲

まねばならぬのです。

勝子の窺機　七郎左工門は信行の無二の寵臣を殺したのですから、そのまゝにして居られないそこで直ぐ樣尾張の國を逃げて美濃の國にゆき、稻葉城を守護して居つた齋藤利政（出家して道三といふ）といふ人のもとに隱れて居ましたが、信長も弟の信行からは責められ、又七郎左工門の不都合を怒つて、齋藤利政に早速返へす樣にと言ひやりましたが、何度賴んでも利政は聞き入れないのみか、良い臣を得たといふ樣な考へで保護して居たのです。恰度その時稻葉城下の在鄕に、勝子の叔父さんが居つたために、勝子は信行に暇をとつてこの叔父さんの許に潛み、ひたすら時機を窺つて居たのです。

すると或時利政の孫の龍興といふ人が、二三人の供をつれて郊外に鷹狩に出た途次、傍らの農家に休みましたに、容姿鄙しからず品位自から備はれる一小女の居るを見て、かゝる山里におく事を惜しみ、利政の夫人の侍女としました。少女は夫人のためにもよく忠節をつくしたので、大層寵愛されて、今はその小女の言ふ事は何んでも用ゐられる樣になりました。

稻葉城中の騎射　時は三月、稻葉城中今や花の雪を以つてうづめられ、昨冬のさびしさおもかけいづこへか消えはてて、ひろさ〳〵馬場は靑疊しきつめたらん樣なる中に、いろ〳〵の花もて飾られたる的がところ〳〵にたてられ、此方には定紋うつた幕をうちまわし、殿中には階近く利政及び夫人を中央にして近臣これを擁し、一門一族皆集りて滿堂整然威儀を裝ひ、今日を晴れと着飾

りたる城下の士女在々の老幼は埒の外に滿ち〳〵て、謂はゞ今の春季運動會ともいふべき、當時の武術の春季演習會の騎射を見物して居ました、夫人の傍には、姿儀端然としてどことなく品位あり威ある年若き女子一人、豫て倍觀の懇願夫人にきゝ入れられてその傍に坐し、階前に名乘りを擧げて的に向かふ騎手の一人に、ひたすら瞳をこらして居ました。

勝子の滿願　この日射手は總員十五名でしたが、五番六番七番とすぎ、はや十番となり十三十四となつて、いよ〳〵最後に佐久間七郎左工門名乘るやおそし、津田彌八の妻云々といふ答へは、思はずも夫人の傍なる少女より聞こえて、はやくも宿志は貫かれました。

電光石火のその擧動に膽を奪はれた諸勇士は、呆然として居つた隙に、少女は平然階下に坐を正して、利政夫妻に向かひ、逐一事情を述へ、主恩を謝し大罪を詫びて自害しよーとしました。

勝子の再生　利政深く少女の貞烈に感じ、一且はその罪を許さうとしましたが、かへりみ思へば、前に信長よりの請求もあり、かつは一婦人のために良士を失つたのを耻ぢ、遂に臣下に命じて所罰する事になりました。傍なる夫人は強ひて乞ひ求めて、その夜一夜自分がこれを預かりましたさうして夫人は今夜の中に是非城中から遁がれさせよーとしましたが、少女は既に本望を果たして今は世に望みなく、かつは夫人の身に罪の來たちん事を恐れて、從ふ色が見えなかつたのです、然し夫人の厚き〳〵同情の涙は、つひに城中を逃れさせました。

小女は緣をたどつて三河に居る德川家康の臣、大須賀康高の許に一時かりの身をよせましたが、康高もその貞烈膽勇に感じ、家康にその事を話しますと、家康は人物を捨てない人ですから、痛く感賞して直ちに自分の城中に入れ、嚴重な保護の下に渥く遇し、他出の折などは必ず二三人の勇士をして警護させて居ました。

勝子の勢力　佐久間盛政は、弟七郎左工門が身分も何もない下賤の一婦人に殺害されたのを遺憾に思ひ、嚴しく探偵の折から、勝子の家康のもとにある事を知り、二人の刺客を遣つて機を窺はせましたが、刺客は却つて捕はれて遠江の見附の驛にさらされました。

この事を聞いて盛政は目を丸くして大變に怒り信長に乞ひ池田信輝を使とし、少女を渡さん事を家康に申し込みました。然るに家康は頭を横にふつて、「彼れは類ひのない烈女である。ことに自分を手賴つて來たものを渡す事はできない」と云つて、頑として言ふ事を聞きません。そこで家康と信長とは折合はなくなつて、尾張三河の二國は、日に〳〵暗憺たる戰雲に覆はれきて、血の雨は今や降らんといふ愴慘く凄じい景色になりましたから、小女は默つて居ません。かくて碌々余命を存するも、一に家康の大恩であるに、まして今自分一人のために天下の安き眠りを覺し、多くの兵士を殺し良民を苦しましめるは本意でないといつて鴻大なる主恩を謝し乞うて自から刀をとり、嗚まれる戰雲の内にかくれてしまつたので、尾三の天下は無事に歸し、勝子の名は千載に殘つて居るのです。

結評　かへりみれば彌八の死は、許嫁の女子の生涯に一大頓挫を與へ、遂に樂しい日月を見る事をさせず。一生をして逆境に沈ましめました。

群雄割據武斷政治の當時の社會は、纖弱なる一婦人をして淺間しくも復讎の悲劇を演ぜん事を命じました。

天下を動かすところの大勢力をもてる誠實は、實に農家の一少女の心底にとらへられ、貞烈となつて靑史にあらはれ、その名のもとに万世に輝いて居ます。

嗚呼一少女！　嗚呼一婦人！　もとこれ尾張在鄕の一農民の女！　信行の侍女勝子よあはれ。

文苑

夕早苗

夕日影さすや門田に賤の男が
　くれぬそのまとさなへとるなり
　　諏訪忠元

夕日影かたふく頃は賤の女が
　さなへとる手もいそしけにみゆ
　　增山三雪子

星をみて出にし賤は星を見て
　歸るまてとるさ苗草かな
　　相澤求

千町田の苗代水に夕月の
　影みゆるまてさ苗とるなり
　　又原保行